

〔資 料〕

## Walter Bagehot (2)

by Norman St. John Stevas

訳 渡 辺 弘  
立 川 順 子

V.

バジョットの批評は形而上学的というより、むしろ実際的である。彼はテニソンの *Idylls* についての評論の中で、「イギリス人は実体のあるものに従事するのを好む」と言っており、この点においてバジョットの精神はきわめてイギリス的である。テニソン、ワーズワース、ブラウニングについての評論は別として、彼の批評に関する著作には思弁的なところが殆どない。M. アーノルド (Matthew Arnold) と同様にバジョットは文学が実人生と結びついているということを常に意識しており、作品それ自体と同様に、それを著した作者に大いに関心をもっていた。友人のハットンがバジョットの死後、その作品を出版するために編集したとき、彼はそれらを「伝記的」研究と「文芸」研究とに分けたが、この二分法は事実を歪めるものである。バジョットの文芸批評は徹頭徹尾、伝記的であり、より納得のいく分類としては文芸的なものと歴史的なものということになる<sup>1)</sup>。バジョットは作家の生涯とその作品の間を自由に動きまわり、それらを統一体として扱い、あるものから拾い集めた問題点を別のものを説明するために使用した。「われわれはある特別の理由のためにハートリーの生涯を詳細に描写した。そのことは彼の性格を理解し、彼の作品の真価を認

1) 私は現在準備中のウォルター・バジョットの作品集の中では、この分類法に従っている。スペースの都合でここで歴史的評論について論ずることはできなかったが、R. peel (1856) と Brougham 卿 (1857) についての二つの特筆すべきすぐれた論文がある。

めるのに必要なことである。そしてその人特有の言葉や行動を選び出すこと以外に性格を描写する方法はないのである」。

この方法の極端な例はシェークスピアについての評論であって、ここでバジョットは事実上、シェークスピアの作品からその生涯に関する様々な事実を探し出す探偵に変身している。例えば彼は *Venus and Adonis* における狩猟の描写を引用して、そのすぐあとにこう書き記している——「ところで、それを書いた人間についてわれわれが“何も”知らないと言うのは馬鹿げている。われわれは彼が野うさぎを追跡していたということを知っているのだから」。その評論の後の部分で彼はこう付け加えている——「優れた知識を真に示すものは、絶え間ない唐突な無意識に近い暗示であり、それは熟知を意味する。というのは、そのような暗示は熟知のみから生ずることができるからである。そしてまさにこの種の視覚や聴覚といった強力な感覚世界への偶然の何気ない絶え間ない言及こそ、シェークスピアの独自の特質なのである」。そのことはまたバジョットの独自の特質でもある。バジョットは自然についてのシェークスピアの暗示的取り扱いを他の詩人たちのそれと対照している。スコットは自然の主な輪郭と特徴は知っていたが、その詳細なところは知らなかったとバジョットはわれわれに教えてくれる。そしてそれはスコット流の風景には充分であるが、イギリスの風景にとっては適当でない。ワーズワスは“複雑で開墾された”イギリスのいなかにはうってつけであったが、彼の困った点は知りすぎていることだった。ミルトンは反対に“自然を見に出かけた。”

伝記的方法是全ての人を引きつけるものではない。バーズ (Burns) の友人に宛て手紙の中でワーズワスはこう書いた——「われわれの仕事はそれらの作品に係わっている。つまりそれらを理解し楽しむことである。とりわけ詩人に関しては、もしその作品が優れているならば、それらが理解され、鑑賞されるのに必要な全てをその作品自体の中に含んでいるということは、真実である」。バジョットはその作品から作者の性格についての何かを推論することが不可能であるという懐疑論的な見解を受け入れなかったと同様に、このような考えにも同意しようとしなかった。「しかしながら確かに人々は作品を書いてくれる

扱い馴れた手段を保有しているわけではない。そしてもしそれらの作品が実際に一人の人間によって書かれたのであるなら、彼はそれらを書くことのできた人間であつたに違いない。彼はその作品が表現している思想の持ち主に違いないし、その作品が内にもつ知識を身につけ、われわれがその中に読み取る文体を所有していたに違いない」とバジョットは問うている。彼は確かにシェークスピアについての評論の中で、その主題を納得させるように描くことに成功している。彼は次のように結論づけている——「われわれは彼が気さくな交際をし、(抑圧され、半ば無意識的ではあるが) 穏やかなさげすみの心をもった市民をじっと見つめ、その昔話を作り出し、彼らの愚かな考えを黙認し、全てを頭の中に詰め込み、弁舌さわやかであるのを見ているように思われる。ある時は空想に満ちた孤独の中で、またある時は陽気な社交界といったくつろいだ場面にひらめく、充実した精神と深みのある黒い目。ある時は深遠な思いに心を奪われ、またある時は取るに足らない気晴らしに熱中し、資産家の劇作家で幸福な仲間をもつ詩人であることを忘れ、万人に対する希望と微笑みのために愛され、尊敬すらされている」。注目すべきことは、心が「常に様々な理論で充ちあふれている」人間がそのような方法を採用し、それを非常に巧みに利用していることであるが、バジョットは自らの理論を発展させるよりは、それに一瞥を与えながら暗示や余談によってそれをほのめかす方を好んだ。彼は自らわれわれに語っているように、“自分の心をもて遊ぶ”ことを楽しんだのである。

文芸批評の中で彼はその心が気ままに戯れさまようまかせ、概括的な理論を導き出すのでなく、個々の芸術作品の与える印象を記録している。この個人的な印象主義は批評手段としての隠喩の使用によって高められている。その評論にはこのような例が多く散りばめられているが、ここでは一、二例挙げるだけで充分であろう。「文体におけるコツは人間らしく書くことであるとわれわれは信ずる。博識であらねばならないと考えるものもいれば、簡潔であるべきと考えるものもいる。タキトゥス (Tacitus) は一対の支柱のように書いた。トマス・カーライルのように読者をはっとさせるものもいれば、その尾を彫り刻んでいく彗星のように書くものもいる。しかし読み易さはこのような観念を無

視し、個性的であろうとし、進んで自分自身の言葉、最も単純な言葉、最初に浮かんだ言葉で書こうとするものに与えられるのである。そしてこの書におけるハートリーの雅量はかくも大いなるものであった」と彼はハートリー・コールリッジについての評論の中で語っている。あるいはビショップバトラーについての彼の評論を例にとろう。「例えばギボンのような作家たちは自分たちの言葉が読むだけでなく、口にして味わっても優れていると信じているのがよく分かる。それらは明らかにあめ玉のように口の中できちんとこころがし、次第に固いところや余計なものがなめらかになって消えてゆく楽しみをもっている。しかしバトラーにはこのようなものは何もない」と彼は述べている。彼は作家の姿を読者の心に直接に届けるために想像力を駆使している。ギボンについて「固い椅子に坐って、硬った手であのむずかしい編集物をゆっくり書いている、堅苦しい洋服を着た紳士を想像してごらん下さい。あなたを一生硬直させるのに充分だ」と語っている。彼の方法は彼が明らかに影響を受けたハズリット(Hazlitt)のそれに大変よく似ている<sup>1)</sup>。ハズリット同様に彼は熱烈な文学の案内者をつとめているが、バジョットの方がずっと文体の芸術的風格と歯切れの良さをもっている。

バジョットの批評における特徴的な方法は、その評論自体を見ることによって最もうまく説明される。彼の最も優れたものの一つはシェリーについてである。バジョットは常にシェリーに言及している。しばしば彼はシェリーをしかっている。つまりヘイリー卿が指摘したようにバジョットはシェリーに苦しみられているように見える。バジョットはその文体にありありと跡を残しているシェリーの「全く衝動的な性格」に魅惑されていたように思われる。すなわち「熱のこもった一行一行を通してわれわれの空想力は彫刻された純粹さと同じ渴望のイメージを見る」。そのような性格は奇妙にも良心を欠いている、とバジョットは主張する。それは善と悪の葛藤を経験しない。「われわれは彼の精神が純粹に微妙な空想があちらこちらと飛びかう、もの想いの光の中に置かれ

1) 1867年6月、バジョットの妻は Fortnight 誌のためにハズリットに関する評論を彼が書いていたと日記に記しているが、この評論の痕跡は発見されていない。

ているのを想像する。不意にある衝動が生ずる。それはひとりぼっちで、争うべきものを何ももたない。その衝動は知性を封じ込め、空想を放擲し、人間性を圧迫する。それは行動へと突進するのである。」

シェリーはバジョットの巧みな対照のひきあいに出されている。バジョットはシェリーをワーズワースやキーツ (Keats) やテニソンと比較している。「ワーズワースはわれわれが知っている通りのこの地球をその特質も含めて描写した。そこには荒地や丘があり、地衣が生え、粘板岩の岩が突き出ている。シェリーは宇宙を描く。彼は星たちの間を遮二無二に突き進む。この地球はイメジャリーの宝庫であって、彼は何か未知の惑星を飾るためにそれを使用する。彼は“天空に瞬く、ごく小さな光”を軽蔑する。彼の主題は広大で無限で測り知れないものである」とバジョットは書いている。バジョットはキーツとシェリーを対立させている。キーツの詩は「豊かで官能的な合成のハーモニー」であり、一方シェリーの詩は「浸透するメロディーの一つの明瞭な輪」である。シェリーがただの水を愛好するのに対して、キーツは赤ブドウ酒の冷たい味わいを楽しむために舌にコショウを置くとバジョットはわれわれに語っている。「彼の詩は純粋な水晶の如き小川のように、すばやく冷たく流れる」。キーツの感受性は「宇宙の壮大な景観によっても引きつけられた。彼はその目が宇宙の壮麗さを見、その耳がそれを聞くのを禁ずることができなかった。自然界の全ての美しい対象は彼の詩の中で一つ一つ名前をあげられて再登場する。逆に美の抽象的観念はシェリーにおいて永遠に祝福されている。それは彼の魂につきまとった。しかしその観念は特殊な事柄とは無関係であった。それはあらゆるものの上に存在する美の全体的な表層であった。それは宇宙の微笑であって世界の表現であった。それはとうもろこしやワインを産み出す土地の光景ではなかった。シェリーの神経は美しさという観念におののいた。しかしいかなる粗野な感情も特殊な対象を彼に押しつけなかった。彼は読書と黙想にふけた。」

バジョットは両詩人をテニソンと比較し、テニソンには二人の詩人の叙情的な力が欠けていると指摘する。「彼らはせかせかと詩を作るように見える。その

上に彼らはせきたてられたままの地点にいる。シェリーの“Skylark”という詩はこの点についての最もよく知られた例である。一人のかなり若い音楽家はかつてジェニー・リンドの歌の魅力は何かと尋ねられた。『ああ、彼女は非常に高く上って、とても長い間そのままの状態であることだ』と彼は答えた。シェリーの全ての叙情詩には、このように大変な高みにいつづけることに似たところがある。彼の詩はあふれるほどに豊かである。彼は絶えず天翔る。そして天空を舞い上がりながら、常に歌っている」。キーツは反対に「この世の明らかな美を歌う」詩人であった。明敏にもバジョットはテニソンの詩における思想の深さに注目していた。そして *The Well Wrought Urn* における C. ブルックス (Cleanth Brooks) の ‘Tears, Idle Tears’ の研究は注目に値する素晴らしい例外ではあるけれども、それは今日でははっきりと認められることのない特質である。バジョットはテニソンの *Idylls* の詩に関する評論の中で「テニソンの詩における溶液（もしそのような科学的な隠喩が許されるとしたら）の中に入れられている思想の量は誠に多量である。もしあなたが100回彼の詩と対面するならば、最後までそこに何か新しい引喩とあなたがこれまで見たこともなかった高度な思想の深遠な跡を見出すであろう。彼の考えはしばしば目新しいものではない。彼は恐らく自ら前進しようとはしなかったのであろう。彼を正当に称賛する人々ですらも、彼に対して全く独創的な思想家という名声を要求しないであろうと、われわれは確信している。しかし彼は知性と教養の時代においても同様に重要なある種の能力を所有していたということを示している。恐らく彼は第一級の『認識者』なのであろう。そして認識は真理の試金石である」と書いている。

ワーズワースはバジョットが最も深く感動し、純粹芸術の観念を具現化するものとして選んだ詩人であった。彼は孤独で瞑想的なバジョットの心を引きつけた。しかしバジョットはワーズワースの欠点に対して盲目的ではなかった。ワーズワースにとって自然は一つの宗教であるということを彼は認めていたが、半ば嘲笑するようにこう付け加えている——「まるで人間は大地を見るために創造されたのであると彼が考えているかのように見える」。彼はワーズワース

の人生観の偏狭さとユーモアのセンスの欠如を明確に認識していた。感覚的な美に対する感情の点では、彼はハートリー・コールリッジに軍配をあげた。「ワーズワースが飾らない、抽象的な美に向けたのと同じ『崇拜』をコールリッジは外的な自然の感覚的な美と誘惑的な要素に向けた」。コールリッジの詩はワーズワースの詩には本質的に欠けている、繊細な魅力をもっていた——「それは言わば、森や水の中の女性のもつ美しさである。それは晴れた日の Rydal の水である。己れを知っているこの世の光沢である。幾人かの女性にみられるように、未完成の感じを伴った美の感覚である」。 “もの静かで細心な才能”が父親の “適応性のある精神” と実に明瞭な対照を成している、引っ込み思案で内向的な子供っぽいハートリーにバジョットは特別な共感を抱いていたように思われる。

バジョットは詩を愛したが、小説も読み、彼と同時代人であるディッケンズやサッカーについてと同様に、スターンやスコットについても作品解釈に光明を投ずるような意見をもっている。彼は G. エリオット (George Eliot) を “現存する最も偉大な小説家” と考えたが、不幸なことに彼の筆による彼女についての批評は殆ど何も残っていない。彼はスターンの小説の “風変りな無秩序” と対照的な彼女の小説の “形式” を称賛した。しかし彼はスターンの作家としての偉大さ、人生に対する感受性の核心をついた。「彼は偉大なる作家である。それは勿論、偉大な思想のためではない。彼の著作には思想と呼べるような文章は一行もないと言っていいほどなのだから。あるいはわれわれの想像力の限界を引き伸ばす崇高な概念のゆえでもない。彼は感覚に訴えるようなものは何も残していないのだから。彼が偉大であるのは、素朴な人間性への素晴らしい共感とそれを描き出す優れた描写力をもっているためである」。彼はスターンの作品を “心の肖像画” と呼んだ。

スコットはバジョットのお気に入りの作家の一人であった。バジョットにとって彼はもう一人の世事に通暁した賢明なる作家としての魅力を大いにもっていた。バジョットはスコットの “健全さ” を誉め称えた。スコットは “病室向きの” 作家であるとバジョットは言っており、確かに彼は死の床で *Rob Roy* を読んでいたとき、自らの処方箋に従っていた。彼はスコットのロマンティッ

クな中世趣味と「われわれがそうあらんと願ったであろうように」中世の時代を描いたことを正しく評価していた。しかしバジョットは中世の欠点を指摘せずにはおれなかった。

全体的な安楽が今日と同じ位に大いに普及していたとは誰も主張できない。ある種の気楽さは後の社会の構造に浸透している。われわれの住居はそれほど耐久力がないであろうし、絵のようでもなく、後にそのような廃虚を残しもしないであろう。しかしそれらは温湯で暖められ、すきま風は入らず、灯心草の代わりにソファが置いてある…分別のある人々は全て中世が大変居ごちの悪い時代であったに違いないと知っている…結論が依存している抽象的な事実をスコットよりもよく知っている人は誰もいない。しかし彼の描写は結果についての全般的な概念を与えていない。軽卒な読者は中世が現在のわれわれと同じ幸福の要素をもち、その上に戦もあったという印象を抱いて立ち上がるであろう。

しかしこの点においてスコットは全ての歴史小説家と同様に、彼の愛読者に捕われた人間であった。「われわれは理論によってその意見が混乱させられるのを好まない。しかしそれらを空想によってかき乱そうとするのは適切でない。歴史小説の作家は彼の主題の一般に知られた概念によって制約を受けている。そして一般にこの通俗的な印象は幾分ロマンティックな印象であることに気づくであろう」。スコットは読者を意識しすぎた作家であったかもしれないが、彼は自発的にそうあらんとした作家であったということを付け加えるのは公正なことである。バジョットはスコットの作品を楽しんだが、彼の限界に気づいてもいた——「彼はわれわれに魂の描写をすることを閑却している。われわれは心と作法と生気をもっているが、魂はこの世を動かすものである。われわれは彼の作品に浄化する力が欠けているのを残念に思う……」

バジョットは明らかにスコットを愛好した。彼がディッケンズを嫌ったということは同様に明らかなことである。ディッケンズについてのバジョットの評論は彼がこれまで書いたもののうちで最も辛辣なものであった。彼はドストエフスキー的な面を除いたディッケンズについての全ての面をみている。ディッケンズのドストエフスキー的な面はギッシング (Gissing) が最初に評価したのであった。バジョットにとってディッケンズは“規格はずれの”天才の代表的



な例であり、いくつかの特性においては優れていたが、彼がちょうど手がけていた仕事にふさわしい性格の“一定の釣り合い”を欠いていた。彼には推理力や人生に関する幅広い見方がなく、プロットを創造する才能がなかった。彼の天分は綿密な観察力にあるとバジョットは考えた。その観察力は都市の生活の描写にはまさに適切なものであった。

ロンドン新聞のようなものである。あらゆるものがそこにあり、全てがばらばらである。家々にはあらゆる種類の人々がいる。しかし「誕生、結婚、死」というリストには隣人間の結びつきがないのと同様に家々の関連性もない。寛容な社説から醜い警察の報告書に目を転ずると、われわれは角を曲って別の世界に入るのである。このことはディッケンズの天分にとっては利点である。彼の記憶は古い建物と風変りな人々に満ちあふれているが、彼はそれらを継ぎ合わせることに興味がない。逆に、彼の心にとってそれぞれの光景は独立した光景つまりそれぞれの通りは別々の通りなのである。彼はまたそれによって生活している人々に見られる独特の観察の鋭さをもっている。彼は後世の人々のための特派員のようにロンドンを描写している。

バジョットは登場人物の創造者としてのディッケンズの欠点を鋭く指摘した。Bill Sykes や Nancy のような例外はあるが、（彼らが下層社会の人間であるという事実は彼らの性質のより深い部分を効果的に生かした）彼の描く登場人物たちは風刺画(カリカチュア)にすぎない。「われわれは一般的に言って彼らを現実と対比させないが、もしそのようにすればただちに彼らが表わす奇怪な誇張に恐れおののく。あなた方はものを言うあひるやものを書く熊を想像できないのと同様に、Sam Weller や Mark Tapley や the Artful Dodger が実際に存在し普通のありふれた人間の間を歩きまわるとは想像できないだろう。彼らは全く通常の社会的交わりの範囲外にいるのである」。それらは何の根本方針もない偶然の集合体であり、「人間性の本質を真に描くものの偉大な作品」に比較することはできない。バジョットはディッケンズの作品が真に「家庭」小説であり、それらが主人、女主人、子供、使用人たちに喜びを与えていることは認めたが、感傷的な雄弁と誇張された風刺画という最悪の欠点を強調する、彼の大衆への迎合を非難した。

## VI.

バジョットによって三人の歴史家たちが考察の対象にされた。すなわちギボン、マコーレイ、グロートである。その中で傑出した記述はギボンについてのそれである。グロートに関する概略はきわめて軽く扱われており、バジョットは歴史家についての先入主にマコーレイをあてはめるのに熱心のあまり、その性格は正しく伝えられていない。歴史家の気質をバジョットは目的よりも行動の方に、現在の行動よりはむしろ過去の行いに興味を抱かせるものであると考えた。彼は次のように続けている——「常に他人の行動に関心をもつこと、精神と意志の諸特質を明示するものとしてのみ記憶される出来事や事件を読者の熟考と注意を促すように絶えず提示する。そしてその諸特質はある程度読者が内心に感ずるものにほかならないが、“われわれ全てから成る世界”である現実世界にそれらを示したいという衝動は併わないところのものである。熟考はするが決して行動はしない。“目前に下院が控えている”が報道員の傍聴席に甘んじていることは、気質の冷淡な無感覚さ、熱烈な衝動への鈍感な無神経、通常の感動に劣る、鈍重な無感動を表わしている」。これらは全てマコーレイについての評論から採られたものであるが、下院の積極的なメンバーであり、高位の大臣職に就いた活動的な歴史家には殆どあてはまるところがない。

しかしギボンは描かれたものとうまく適合している。バジョットはギボンの *Decline and Fall* に関していくつかの手きびしい批判を行っている。(ローマ)帝国についての記述を誉めたあとで、彼は何気なく次のように付け加えている——「読者はローマ人について読んでいるという気が少しもしない」。続けて彼は「ローマ人には好戦的な狂信、清教徒的な本質、内的潜在的な抑制された熱狂の宗教があり、それは作者の冷淡な懐疑主義とは相いれないものである」と説明している。そしてちょうどローマ人の精神を見逃がしていたように、ギボンは初期キリスト教徒の精神をも把握しそこなった。「広く知られた15世紀、16世紀の章の本質は、実は現世の調子による天上の出来事、断固とした声が語る畏怖すべき事実、見透すものの言葉による本質的な真実についての描写にすぎ

ない」とバジョットは適切に指摘している。「慎重な懷疑主義者は明白な疑問に掛かり合うことすらしなかった」。ギボンがコンスタンチノープルの描写に至るときのみ、「文明の力ではなく、その形態の歴史を書いているために彼の筆は最も冴える。それは華麗さと活力の誇示であるが、力強い生命力や内面にまで至る迫真性はない」。歴史家としてのギボンの地位は彼が人間の心や情熱に何ら共感を抱いていないために、人間性を描く偉大な歴史家の中ではなく、大事件を秩序正しく語る歴史家の中に位置する、すなわち万国の歴史についての沈着な解説者、人間の熱烈な感情や気まぐれな運に対して努めて気どった冷淡さで対処してきた冷静な芸術家の一人である。

もしバジョットがギボンに関する評論以外に何も書かなかったなら、彼は偉大な喜劇作家の一人の称号を与えられていただろう。その評論の骨子は書齋に寛いで坐っているギボンの落ち着いた姿と彼が描く世界を震撼させる事件の流れとの滑稽な対照である。

「あなたはメヌエットの流れている間に全てをすべきだ。ギボンが歴史を書いたのはそのようなときであり、それは当時の風習であった。あなたは花柄のヴェルヴェットのスーツを着て猟の獲物と剣をもち、すまして微笑み、落ち着いて競技を回っている彼を想像する。……真面目くさったお辞儀と儀礼的な礼儀正しさ、完全な敬意というものが目に浮かぶようだ」とチェスターフィールド (Chesterfield) 卿は語った。「恐らく西ゴート人が首をはねたとき、彼はそれで終わりだと考えた。しかしそうではなかった。彼は歴史を作っていたのであった。ギボンがそれを書きとめていたからである」とバジョットはいたずらっぽく語っている。このような滑稽な要素は彼の著作のいたるところに見い出される——彼は大変頭のよい作家であったが、L. ストレイチャー (Lytton Strachey) とは違って事実を曲げる誘惑に負けることはめったにない。バジョットは機知に富み、冷笑的で皮肉屋であった。しかし読者は彼の作品にあまり洗練されていないが、ユーモアを見い出す、時として彼は全く冗談に我を忘れる。彼の義妹が伝記の中で書き記しているように、何ものもバジョットにおける少年のような心を消滅させることはなかった。

バジョットの皮肉は非常に痛快である。読者は主賓席における H. コールリッジの描写にそれが利いているのがわかる。当時ハートリーは明らかに行き過ぎた公然の非難の矢面に立たされていた。

このことは議員連の長たちにとって、最も感謝すべき習慣ではない。あるお偉方の権威者が「あなたは Derby 卿が首相になるべきであるということを否定なさるのですか。私が何某の長官になるべきでないとななたがおっしゃるのはもっともなことだ」と語った。こうした習慣のためにあわれなハートリーは彼の大学の指導者のお気に入りとはなれなかった。興奮しやすく、まわりの若い人々に「健全な」意見を教え込むのに殆ど役に立つ見込みのない人間をその地位から解任するためにもし十分な機会が見い出されれば彼がうまくいかないだろうと予言するのに将来に関する洞察力は必要ではなかった。

学長は「畏怖の雰囲気をもち、まるで自分自身が存在していることに驚いているかのように不思議そうに歩くべきである」しかし馬鹿馬鹿しいという強い感情のためにハートリーはこの価値ある習慣を身につけることができなかった。恐らく彼は実際のところそれを獲得しようと試みたことは一度もなかったのであろう。したがって彼は個人指導教授として評判がよくはならなかったし、「若い人々に影響力を及ぼす」と表現されたこともなかった。」とバジョットはわれわれに語っている。

バジョットが皮肉を存分に利かせているもう一つの主題は、ヴィクトリア朝中期のイギリスの人のローマ・カトリック教会への態度であった。彼はオックスフォードについての評論の中でこう書いている——「イギリス人に建物が現在使用されていないと言いなさい、そうすれば彼はじっと凝視するだろう。そこは下品であると言えば、彼はそれを調査するだろう。科学は教えられていないと聞いても意に介さないだろうが、そこがローマ法王庁であることをほのめかしさえすれば、彼は立ち上ってそれを焼き払ってしまうだろう」。バジョットの皮肉がもっともよくあらわれているのはギボンが大学時代にカトリックに改宗したことについてのコメントである。

オックスフォードの学生がこのような手段をとることは今日では当然のことと思われるので、そのことが生み出した驚きを人は殆ど理解しがたい。枢密院が干渉したと Sheffield 卿はわれわれに語っている。そして巧みな行政上の判断で一人のロンドンの本屋の主人を調べた。ルイス氏とかいう人で、それには全くかわりのない人物であっ

た。Buriton の荘園では、たとえ愛する Edward(Gibbon のこと：訳註)が猿になるつもりだと公言しても、多分それほどのセンセーションは巻きおこさなかったであろう。イギリス人はカトリック教徒は一種の「生きもの」と信じてきた。そして全ての健全なる精神の持ち主は全質変化（聖体のパンとぶどう酒をキリストの肉と血に変させること：訳註）やろうそくや聖母マリアのみ栄えへの信仰に比べたら、愛する息子にしっぽと毛皮が生え、木の実を好むようになる方を選ぶだろう。

バジョットは彼と同時代の人々の俗悪な反カトリック的感情の影響を少しも受けなくて—— 事実カトリック教会の歴史的社会的威信は彼の心を大いに動かした—— 彼はその権威を十分に認めていた。バジョットの風刺にはスウィフト的のところ、気むずかしい点や残忍なところはない。ただ一つの例外としては、彼が書いたもののうちで最も辛辣なものの一つである ‘Senior’s Journals’ についての評論が挙げられるが。彼は並はずれて寛大な人間であり、世間が実際どのようなものであるかを理解していると思っている彼の周りの実業界の人間を面白がったが、彼らを軽蔑することはなかった。彼はシェークスピアに関する評論の中で次のように書くとき、自らの態度を正確に表わしているのである—— 「尊大で富裕な実業家につきもののように思われる愚かな意見、狹量な考え、誤った推論を評するのを常に大いなる楽しみとすることは、悪意と呼ばれるものの範疇に入る」。彼の風刺はブラウニングについての彼の評論の中の次の一節で分かるように、常にユーモアの感覚によって和らげられていた—— 「一部は主題上の、また一部は文体上の欠点のために、ブラウニングの作品の多くは読者の熱意と大部分の読者の気質には適さない義務感を要求している。競馬用語には“持久力”という言葉がある、持ちこたえる馬もいれば、そうでない馬もいる。しかし特別風変りな性質をもった読者でない限り、いかなる読者もそのような作品を読み通すことはできない。人間の性質には充分な“持久力”というものは存在しないのである」。

バジョットは『月並みな生活から生まれる想像力』を馬鹿げたものと呼んだ。対照から成る彼自身のユーモアの感覚は形而上学的な基盤をもっていた。「高官(Dignity) No. 1 が高官 No. 2 と彼らの地位にふさわしい話題について礼儀正しく会話を交わす宇宙は恐らく偉大な識者たちの接見の場であり、巨人の思想

家たちの晩餐会場であろう。しかしその宇宙はこの地上の最高の魅力を欠いているだろう——つまり偉大なものと取るに足らぬもの、現世のものと天上のもの、卑しいものと畏怖すべきもの、永遠なるものと瞬間的なものとの混濁を」と彼は書いている。この人間の心の本質とその働きとの対照の感覚はバジョットのユーモアの根本であった。彼はこう問うている——「魂はいかにして商人となりうるのか。亜麻仁の値段やバターの値の下落、獣脂の風袋、あるいは麻の仲買手数量は不滅の神とどのような関係があるのか。永遠なる人は『雑費』を借り方に記入したり、『運賃前払い』を請求したりできるであろうか。……魂がその靴のひもを結び、精神が洗面器で手を洗うようなものであって、全てが不調和である」。

ユーモアとともに道徳はバジョットの批評を特徴づけている。倫理的な色合いは彼がユニヴァーシティ・カレッジにおいて道徳哲学の金メダルを獲得した直後に出版されたベイリーの *Festus* に関する批評である、バジョットの最初の評論の中に色濃く出ている。彼はベイリーの文章が事実と批判して、その倫理思想の弱さを曝している——「優勢な原理の確実性は劣等なもの消滅の中に存する」とベイリーは主張するが、それはバジョットの考えによれば、“倫理学のいろは”を無視するものである。ベイリーには因果応報の法則の観念が全くなく、この点において彼のファウストはゲーテのそれと同様にマーロウ (Marlowe) 作のファウストに劣っている。後年の評論においてはバジョットの道徳観はそれほど明白には表わされていないが、道徳的な含蓄は別の基準に従属されているとはいえ、その中にみられる。アーノルドやラスキン (Ruskin) とは異って、バジョットは決して説教をしたり、小言を口うるさく言ったりはしなかった。道徳的な問題においては、きわめてヴィクトリア朝人らしからぬ平衡感覚を彼は常に保っていた。

「卑劣な精神をもった高潔な人ほど不快なものはない。度が過ぎた道徳性ときわめて偏狭な宗教性は、必然的に反感を買うものである。それは不釣り合い、不自然で不快感を催させる優越感における人間性の一片を表わしているにすぎない」と彼は書いている。

彼には全くヴィクトリア朝の上品ぶった態度がなかったわけではないが、(彼は性的な事柄を論ずるときには少し身震いするように思われる) バジョットのその問題についての非難は常に注意深く和らげられている。“最も明瞭な欠点”として *Tristram Shandy* の卑猥さを採り上げて、上品さは聞こえる『範囲内にいる人次第であるようなところがある』と指摘して18世紀の風俗という適切な背景の中に巧みにそれを置いている。彼は続けて“若い淑女たちの文学”は当然短く切りつめなければならぬ、また「不十分な題材についての思想と道德規範が習慣に基づいて形成されることはきわめて重大な悪である」と警告している。彼は“今はもう消滅してしまった社会の当然の産物”にすぎない卑猥を紹介したことに対してではなく、自らの主題をほくそえみ、“卑猥のための卑猥”を導入したことに対してスターンを非難して結びとしている。一方、ディッケンズはその慎重さのために誉め称えられている——「耐えがたいほど不自然にならずに *Mrs. Gamp* のユーモアを扱うことのできた作家は他にいなかったであろう」。しかしその称賛もただちに軽減される。「偉大な小説家の多くが屈服してきた様々な誘惑に対するこの異常なほどの鈍感さは、小説芸術が特に主眼とする人生の一部を描くことにディッケンズが全く不向きであることと多少関係があるということは容易に信じられることである。彼は存在してしかるべきである恋愛事件も存在すべきでないそれも描いていない。

サッカーは慣習という縁を巧みにフィギュア・スケートで滑りながら、道徳家を憤慨させることもなく、明敏な読者に風刺を伝えようとした。彼はあのうるさき型で手ごわいイーストレイク (Eastlake) 女史を欺きさえた。彼女は自ら主宰する有名な *Quarterly* 誌の記事の中で *Jane Eyre* を激しく非難し、「女性の邪悪さに関するこの上ない典型をわれわれの感情と礼節へのごく僅かなショックでもって得心させていると *Vanity Fair* を好意的に対照した。ウォルター・バジョットはそれほど天真爛漫ではなかった——

サッカーの作品を読む者は誰でも、彼がたえず作品の中で描くことができる世界と、描くことを禁止された世界を分け隔てている境界線にできるだけ近く踏み込んでいるという印象を受ける。誰もこの完成した芸術家ほどにはその境界線がどこにあるのか、

その曲がり具合がいかに風変わりであるかを知らない。彼に対する非難は、彼がそれについてこの上なくよく知りすぎているという点である；注意深さと好奇心に満ちた目で、彼がたえずその端に接近し、いかに完全に彼が精通し、向かい側の禁止された区域をいかに面白くすることができるかを巧みな技巧でほのめかしているということである。彼はただの一つも慣習的なルールを踏み躪ることはない。しかし同時に現実の社会についての彼の描写に、目に見えない不道德の影が殆ど常に窺える。

彼の空想の中に何がよぎっているかを誰でも気づくのである。

俗物趣味に対するサッカーの強い執着もまたバジョットによって看取された。バジョットはサッカーの行き過ぎた俗物根性に対する中傷をそれが実際は許容される欠点にすぎないのに、許されざる侮辱であると非難した。サッカーは自ら社会階層についての意識が過剰であったのだバジョットは結論づけた。

## VII.

バジョットは従来言われていた通り、文芸の一貫した理論家ではなかったが、文学の本質とその目的についての独自の見解をもっており、それらは彼の著作から窺い知ることができる。アリストテレスと同様に、彼は詩を尊重し、それが単なる優雅な遊びにすぎないという考えを嫌悪した。バジョットにとって詩は“深遠なるもの、教化するもの、人間に関する諸事を最も確実にかつ賢明に高めるもの”であった<sup>1)</sup>。歓びは詩の目的ではなく、条件であった。詩は感情に係わっていると *Festus* に関する評論の中で述べており、彼は詩の定義を感情表現、想像力による対象の描写であると解している。「それはプラトンの表現によれば、心と他の全ての魂とを区別している独特な調子や痕跡を観察し、それらを斟酌するのを熱望するそれ自身単独で存在する魂である」。しかしながらバジョットは平衡を保とうと努めている。彼はマシュー・アーノルドの“崇高な行為”の理論を黙殺するだろう。詩は広範囲に渡っているが、散文よりも意味の上でより強烈で、文体の上ではより簡潔であらねばならない。「詩は記憶さ

1) ワーズワース：「全ての偉大な詩人は教師である。私はただ教師と思われることを望む」。



れやすく、勢いがあり鮮烈で、『短く完結して』いるべきである」。

バジョットは想像力の働きについてきわめて独特な理論をもっていて、日常の体験の中にその働きの基礎を置いた。創造力のための題材は、感受性によって与えられねばならないと彼は考えた。「現実と思われ得であろうものを想像する前に、人は今現実であるものをよく知らなければならない」。この現実体験の欠如はシェリーの詩の独特な性質を説明している。「シェリーの記憶には積み上げられた“人生の蓄積”がなく、ありふれた人物の莫大な蓄積がなかった。彼の知性は力強い現実把握には向かわなかった。その鑑識力はむしろ様々な理論の巧妙な洗練化と絶妙な抽象概念の蒸留化を指向した。彼の想像力は彼の理解力がそれに与えたものを具体化した。彼の想像力はその他のこととは一切関係がなかった」。ものごとに対する感受性は欠くことができないものである。

「体験が重大なものになるには一つのこと、すなわち体験してゆく性質が重要である。機会があるだけでは充分でなく、それを感じる必要がある」。想像力は“一瞥する”能力であるとバジョットは主張した——「それは集中力を産みはしないものだ」。コールリッジと同様に、彼は想像力(imagination)と奇想(fancy)とを対照させた。想像力は形作る能力であり、“具体化し、活気づける”概念的な力である。一方、奇想は主として増大と装飾に係わりあう、より繊細な能力である。

A. シュレーゲル (August Wilhelm Schlegel) は 1801 年から 1802 年にかけてのベルリンでの講演で“古典的”と“浪漫的”という言葉を創案し、それらの語はコールリッジによって英語圏の世界に伝えられた。50年代までにそれらはイギリスにおいて確立し、バジョットはそれらをはっきりと意識していたが、“純粹、華麗、怪奇、”という彼自身の考える三つの型、すなわち彼がワーズワース、テニソン、ブラウニングの中に縮図化されているとみる様式のためにそれらをはねのけた。バジョットの類型についての理論はこの分類に密接に関連しており、その理論はH. リード (Herbert Read) 卿が指摘したとおり、奇妙なことにユング (Jung) の理論の先鞭を着けている。類型へのバジョットの関心は早くも *Festus* についての彼の評論に現われている。バイリーの ‘Festus’

とゲーテの‘Faust’は共に類型的な人物であって、彼はそれらの人物を本質的には一人の個人である、マーロウの Dr. Faustus と対照させている。中世は当時享受された孤独のために後の時代よりももっと個性を助成したとバジヨットは主張している。Dr. Faustus は事実、中世の生き残りである。全ての人に共通の性質が少数の人に属する性質よりも顕著になっている現代においては、個人はより少なく、類型が一般的になっている。

作家の仕事は類型に係っているとバジヨットは主張している。「人間に関して無数の種類があるが、これらの種類のそれぞれには、もし言葉の範囲を拡大すれば、種類の境界を限定するような弁別的な類型がある」と認めている。文学は「それぞれの種類の中の類型、それぞれの多様の中の典型、それぞれの互換の中の中心的な目立った特徴を描写することにより、種類、多様性、互換を描いている。この点において、芸術はある特定の対象の“特質”の再現を目的とすべきであると考えたハズリットに彼は類似しているし、恐らくその影響を受けたのであろう。ちょうど画家が画趣に富む (picturesque) 人間や情景を発見するために現実の世界へ入り込まねばならないように、作家や詩人は「自然の女神が彼のために意図し、作品の中で生きるであろうような」『文趣に富む』(literatesque) 人間や情景を見い出さねばならない。『文趣に富む』とは「文学作品の中に採り入れられるにふさわしい」という意味である。これらの類型は3つの異った型、すなわち純粹(あるいは古典的)、装飾的(あるいはロマンティック)、そして怪奇的(あるいは中世的)の型に描写されよう。純粹な文学はその特徴として単純さが挙げられる——「見る事が可能な全体は、ただちに現われ、細部に達するが、細部それ自体は見られない。われわれは観念を与えてくれるもののかを考へはしない。われわれは観念それ自体に没頭している」。それは「申し分のない完全な姿でそれを思い出すのに必要な正確な量の付帯情況をもち、それ以上の量は必要でない」。感傷にひたるワーズワースと登場人物を描写する際のミルトンは簡素な文体を例証している。 *Paradise Lost* における地獄での論争はバジヨットによって英文学における簡素な文体の最高の業績として選ばれている。対照的に、装飾的な芸術はそれがさきえられ

る最大の数の情況で文体を取り囲みたがる。それは選択、選抜によってではなく、蓄積と集合によって機能している。その着想は簡素な文体におけるように、それがもちたえられる最少の衣装を与えられているのではなく、それが収容しうる最も豊かで複雑な衣装を与えられている。この文体の例としてバジョットは 'Enoch Arden' を選んで、「純粹な芸術を産むことが出来ないような」劣った事物を描くのに最も適切に使用されるとほめかしている。最後に怪奇的なものは正常な類型ではなく、異常な実例を取り扱う。古い哲学の言葉を使用すれば、自然の女神があらうと努めるものでなく、何かの過失によって偶然そうなってしまったものを扱っている。

バジョットは歴史的分析によって彼の類型に関する理論を補足している。詩は非人格性において始まると彼はわれわれに語っている——「ホーマーはある声、堂々とした声、鋭い目である、そして明るみに引き出す頭脳である、そしてこのことがわれわれの知っている全てである」。最初の芸術の普通の主題は戦闘であり、英雄的な先祖の行動である。これが廃れ、伝説、伝統の新たな理想化である、劇的な芸術にとって代わられる。文明はもう一つの変化をもたらす——「人間は自分たちが見たものを述べるだけでなく、意識しているものを表現したいと願う」。このことは、多くの形式をもつがその本質は変化しないままである叙情詩の発展を促すことになる。「それは表現するよう意図されていて、巧みな者が表現すると、ある気分を表わしたり、ただ一つの感情を表現したり、人間性におけるある孤立した憧れを表わす者もいる」。叙情詩は断片的な人間を取り扱うが、文明が進歩するにつれて全体としての人間を扱う、新しい型の詩がそこから成長してくる。これは“自己描写的”な詩であって、詩人自らの性格の“全要素”と係わっている。

## VIII.

この評論も結論に近づいたが、解答すべき最後の疑問がまだ残っている。バジョットは偉大な批評家であったのだろうか。現代の文芸上の定説では恐らく否定されるであろうし、もしこれまで述べられた種々の説から判断するとした

ら、同意したい気になる人もいるのであろう。それらの評論はバジョットの才能を最大限に発揮したのではなく、また広範な影響力を及ぼすこともなかった。しかし、もしバジョットの作品を全体として眺め、彼が常に作家の本質に向けている洞察の深さを考えるなら、われわれは肯定的な答えを出さねばならない。しかしまさに彼の批評がきわめて独自で、個性的であったために、彼はいかなる学派も創始しなかった。しかしながらこの評論が示してきたことを私が願うように、彼の批評は個性的であるだけでなく、哲学的、形而上学的基盤をもっている。それは19世紀の批評において高い地位を与えているところの明晰さと眼識を備えている。ただワーズワースについて書くときのみ、彼は単なる追従に墮する危険がある。バイロン (Byron) を永遠の忘却に委ねるときのように、時として彼はひどい判断の間違いをおこしている。しかしこれらは些細な欠点にすぎない。マシュ・アーノルドは彼の文芸批評の卓越性を認めて、「イギリスの政治や宗教におけると同様に英文学において稀な『飾らない真実』に対する関心」を示しているとそれらを称賛した。批評家にとって手ごわい試金石となるものは同時代人の評価で、バジョットはこの基準をパスしている。セインツベリー (Saintsbury) が注目しているように、彼は19世紀中頃の詩を先導する者たちの中で最初にブラウニングとテニソンの真価を認めた一人であった——彼のクラフについての分析は、この上もなく鋭敏である。ディッケンズとサッカーについての評価は、手きびしく、痛烈である。ただ残念なのは、彼の批評における偏頗である——彼はブロンテ (Brontë) 姉妹やメレディス (Meredith) について全く言及していないし、ジョージ・エリオットについては“現存する最も偉大な小説家”と誉めている、ほんの一行のそっけない文章だけである。

結論的に言って、優れた批評であるかの唯一の分かりやすい判断基準は、それを人々が今尚読んでいのかどうかということである。バジョットの批評はこの明白な長所を保持している——つまりそれは生き永らえている。彼と同時代のもっと学術的な批評家は忘れ去られてきた。彼らの一人についてバジョットはシェークスピアについての評論の中でわれわれにこう語っている——「大

変学識があるが難解な著者であるウルリッチ (Dr. Ulrici) 博士はシェークスピアがその戯曲の全てにおいて奇妙な感情とキリスト教の教義を説くことをもくろんでいたことを発見し、*The Midsummer Night's Dream* をその平信徒のしろうと説教の見本であると考えている。これはウルリッチ博士がシェークスピアについて考えている内容である。しかしシェークスピアはウルリッチ博士についてどのように考えたであろうか。“頭の鈍い人だ”というのが、学識のある教授がその入念な学術論文を献げた詩人から受け取る意見に近いであろうとわれわれは信ずる」。このことだけはわれわれも確信をもって言える。シェークスピアはウォルター・バジョットにそのようなことは決して言わなかったであろう。